

館 報

まつやま

第15号

題字 松山篤書
平成18年10月13日発行



長野県上水内郡農会主催 馬耕競犁会で連続3回優勝し優勝旗とともに記念撮影する中山宇一氏
(昭和11年5月14日 於豊野公園)

1. 長野県上水内郡農会主催馬耕競犁会……………表紙
2. 理事長 松山 徹 逝去…………… 2
3. 追悼の辞—お別れの会実行委員長—…………… 3
4. 競犁会…………… 4～8
5. 資料紹介 (初期のメリーティラー) …………… 9
6. 報告事項……………10

財団
法人

松山記念館

理事長(館長)松山 徹逝去



体調を崩され療養中であった松山徹理事長は、平成十七年十二月二十一日未明に七十三歳で天寿を全うされました。松山氏は、当記念館創設以来理事を、そして平成五年四月から理事長を努められ、率先して記念館運営にご尽力頂きました。

ご遺徳を偲び心からご

冥福をお祈り申し上げます。

そして故松山徹氏の「お別れの会」が、平成十八年二月二日午後、丸子文化会館に於いて松山(株)および北海道ニプロ(株)、協同サービス(株)、松山技研(株)、松山スキ工業協同組合、財団法人松山記念館のグループ葬にてしめやかに執り行われました。

お別れの会委員長は、丸子町の堀内憲明町長、副委員長は、松山(株)・青柳正専務、北海道ニプロ(株)・星台寿幸常務、協同サービス(株)・関賢治専務、松山技研(株)・福井専務がそれぞれ務められました。

当日は、前日の雪で大変寒い日でありましたが、理事長ゆかりの方々、業界関係の皆様及び地域、行政、株主の皆様等々一七〇〇名を超える大勢の皆様にご参会頂き、故人

の冥福をお祈りいたしました。

お別れの会は、黙祷、社歌斉唱の後、お別れの会委員長・堀内憲明丸子町長により追悼の辞が述べられ、引き続き日農工会長・中野弘之氏(井関農機(株)社長)、長野県中小企業団体中央会会長・細萱英穂氏代読、副会長・星澤哲也氏(東京法令出版(株)社長)、上田高等学校野球部OB会会長・中村義介氏(中村工業(株)社長)及び社員を代表してJAM松山労働組合執行委員長・関政人さんの四氏から弔



辞を頂きました。ありし日の姿を偲ぶ思い出のVTRが上映される中で各方面より寄せられた多数の弔電が披露・奉読される場面もあり万感胸に迫る会となりました。

お別れの会式典に引き続き会場を、小ホールに移して「偲ぶ会」がおこなわれました。なお、理事長は長年の産業界・労働界への功勞により、一月十六日の閣議によって、正六位旭日双光章に叙せられ、式典会場でその報告もなされました。

追悼の辞

お別れの会実行委員会委員長 丸子町長 堀内 憲明

本日、ここに松山グループの代表者・故松山徹様のご葬儀がしめやかに執り行われるにあたり、謹んで哀悼の言葉を捧げます。

体調を崩され療養中でおられることはお聞きしておりましたが、必ずや健康を回復され元気なお姿でお目にかかれることを信じておりました。

去る十二月十二日、あなた様の突然の訃報に接し、驚きとともに深い悲しみにつつまれたのであります。

享年73歳、あまりにも早すぎるご逝去、誠に残念でなりません。それにいたしても奥様をはじめ残されたご遺族の皆様方のご心の中いかばかりかとお察し申し上げる次第であります。

松山さん、あなた様は、たゆみない研究心と卓越した経営手腕により、ニプロを農業用作業機械のトップメーカーとして確固たる地位を築くまでに育てあげられました。日本本農業史に残る創業者松山



造翁、丸子町名誉町民第一号の松山篤翁の後継者として、急速に変化する日本農業に先進的な技術革新を加えられ、その名を不動のものとし、松山株式会社を今日の名声

に導かれたのであります。また、温厚誠実なお人柄のあなた様は、人々の尊敬を集め、長野県地方労働委員会委員・長野県機械金属工業振興協会会長を初め数々の要職を歴任され、産業界の重鎮として卓越した指導力を発揮されました。

丸子町のみならず長野県及び日本の産業発展に大きな足跡を残され、業界におけるご功績・ご功労は誠に多大であり、数々の賞を「ご受賞され、平成七年春の叙勲では藍綬褒章の荣誉に浴されました。

そしてまた、産業発展や会社経営にとどまらず、従業員の生活の安定や地域社会の発展のために、地元企業と共に成長することを指針として歩んでこられました。丸子町を愛し、町の活動に対しても会社ぐるみで積極的に参加していただきました。

博物館法に基づく財団運営

の松山記念館は特筆すべき貴重な事業であり、文化講演会の開催など文化面での地域貢献にも多大なものがありました。

あなた様は誰からも好かれ、その飾らないお人柄とその優しさに接し、親しみと共に深い尊敬の念を抱かずにはいられません。

まもなく、丸子町も合併により大きく変化する時期を迎えています。あなた様のご慈悲の光をいただきながら、松山株式会社と共に力強く歩んでまいります。どうか安らかに眠りください。

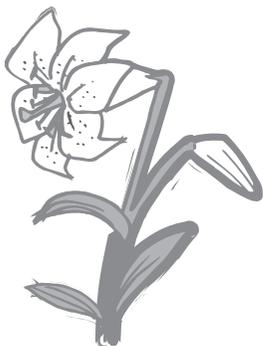
25,000人の町民の皆様、全国からご参列いただきました多くの皆様と共に生前の面影をしのびつつ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。お別れの言葉といたします。

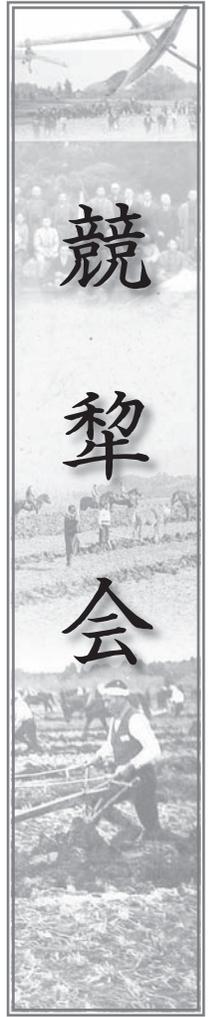
第十六回理事会 第十七回評議員会開催

平成十八年二月十日(金)
協同サービス(株)二階ホー

ルに於いて、理事会、評議員会が開催され、平成十七年度事業報告及び決算報告(会計監査報告)と平成十八年度事業計画(案)及び同予算(案)と理事欠員補充(案)について審議され、出席者全員の承認を得た。

理事長松山徹氏逝去により理事一名欠員となり、今期は改選期でないため欠員補充のみとし、塩川勝也氏が新任され、理事長には松山信久が選任された。





競 犁 会

すき
犁の操作と田畑の耕うん技
術を競う競犁会は、犁を全国
に普及していくにあたり大き
な役割を果たしました。農民
は犁耕技術を磨き競うことに
よって技術が向上しました。
さらに競犁会による熟練技術
の披露は、参観者を啓蒙し牛
馬耕の浸透に効果をもたらし
ました。

競犁会のおこり

競犁会をはじめに提唱した
のは、福岡県糟屋郡多々良村
の藤野小四郎といわれています。
藤野小四郎は当時糟屋郡
ですでに使用されていた抱持
立犁かかえもっ
たすきの改良をしながら、深耕
と能率的な犁耕法を研究し、
さらに使用法の訓練の必要を
説き競犁会の開催を目論見ま
した。

こうして明治十三年に多々

良村で競犁会が実現し、その
後もこの多々良村では「競犁
会発祥地」として活況ある競
犁会が毎年開催されました。
さらに藤野は福岡県へ競犁
会開催を建議し、明治十七年
(一八八四)には大日本農会
福岡県支会主催として県規模
による第一回競犁会が開催さ
れました。

第一回全国競犁会は プラウが主流

全国競犁会の開催は明治
十九年(一八八六)二月十四
日に第十四回農産品評会の際
に東京芝区三田育種場内で行
われたのが最初といわれてい
ます。

第一回全国競犁会の「競犁
会規則」によると、競技に使
う犁は、和式・洋式を問わず
使用でき、一台の犁に使用す

る牛馬の頭数も任意でした。
牛馬の和種か洋種かなども含
め大会の二週間前に申請しま
した。競技では馱術・姿勢・
発掘の深淺・発掘の広狭・発
掘の屈曲が審査の対象となり
ました。当日の出場競犁者は
九名。それぞれ二馬犁で参加
しました。二馬犁ということ
は、プラウなどの洋犁を使用
して競技したことがうかがい
知れます。競技者は駒場農学
校・三田育種場や各地方で
ずっと馬耕をしてきた人たち
だったので、ほとんど犁耕技
術に差がなかったそうです。

馬耕の普及と原田勝三郎

長野県での馬耕競犁会の最
初は、明治二十七年十一月に
更級郡更級村で開催されてい
ます。

馬に畜力犁を牽かせる馬耕



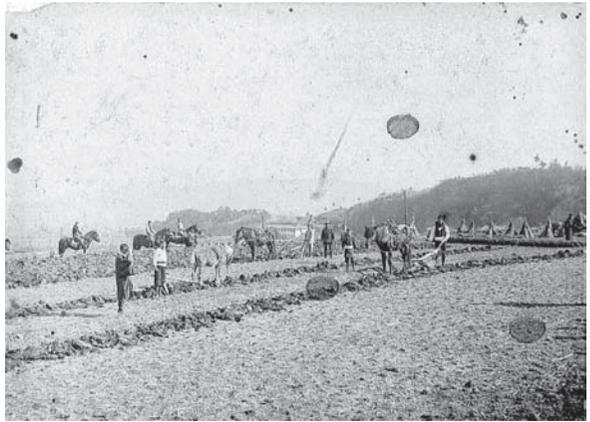
競犁会風景

の技術は、福岡県から招聘し
た原田勝三郎という米作改良
教師が教授し広めたもので
す。

明治二十四年前後から、関
東から東北地方にかけての各
県は、先進的農業をしていた

福岡県の重留村の林遠里えんりが起
こした農業普及団体「勸農社」
から社員を米作改良技手とし
て招聘するようになります。

米作改良技手は短冊苗代・塩
水選種・馬耕・雁爪がんづめによる中
耕除草など当時としては先進



競犁会（明治末期）

明治二十八年には農事改良教師として山部信が着任し、原田勝三郎は

更級郡の改良教師に招せられます。更級村には原田勝

三郎を心酔する「改良率先家」坂田寅次郎が米作改良を實踐していま

した。坂田寅次郎は明治二十八年二月から更級村村長に就任しており、

原田勝三郎を更級郡の農事改良教師

として招き寄せたことが推測できます。

明治二十八年五月に、県の米作改良教師であった原田勝三郎が更級郡農事改良教師に転出したことから、更級郡は先進農業がいち早く展開しました。

治二十七年十一月二十二日に更級郡更級村須坂で行われま

した。縦三十二間、横三十間の土地と縦二十間、横三十間の土地を使って、畝打ち平打ちの競争をしました。第一回とい

うこともあって北佐久郡会議員小山量平、北佐久郡役所農

商主任上原修、岩村田町長遠藤善九郎、上水内郡役所早川

繁夫、埴科郡役所三浦某、更級郡役所里見純も臨席しました。審査長は長野県米作改良

教師の原田勝三郎がつとめ、一等一人二等一人三等七人、

四等二人、五等一人が選ばれ粟屋郡長から犁先を清水県属からは農業全書をそれぞれに賞与されました。信濃毎日新聞の十一月十七日の記事に

長野県における最初の競犁会

第一回更級村馬耕競犁会は明

「原下に於ては之を嚆矢とす」とあり「互いに益するところ少々となさざるにつき」

第二回も追って開かれ益々盛大に行われるだろうと大会開催の有益性を強調しました。

この大会は県属から賞品の授与があることからみても更級郡の競技会ではなく、長野

県農政において実施された最初の競犁会であるといえます。それは更級郡第一回馬耕

競犁会が明治三十五年に更級郡農会主催で開催されていることから類推できます（長野県農会報四十号）。

第二回競犁会は翌春の明治二十八年五月五日に川柳村で開催され、三百人を越える人が参観しました。この時は更級郡農事改良教師となった原田勝三郎は競犁者の世話役を

し、長野県農事改良教師の山部信と更級村の改良率先家坂田寅次郎が審査委員となりました。一等の更級村坂田亀太郎をはじめとして二十一人の受賞者があり、一等には犁先二個、二等には犁先一個、三等には犁先一個、

【福岡県勸農社員の赴任】

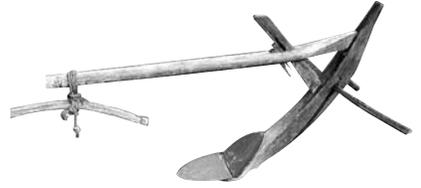
- 北佐久郡 榊兵三
- 南佐久郡 森下岩吉
- 更級郡 原田勝三郎
- 上水内郡 品川安右工門
- 榊浅太郎
- 下水内郡 筒井平七
- 上高井郡 蓑田友吉
- 下高井郡 草場浅吉
- 南安曇郡 高田久次
- 北安曇郡 間鍋亥吉
- 東筑摩郡 長沼信吉
- 西筑摩郡 井出辰二郎
- 諏訪郡 小嶋常二郎
- 小県郡 古川列一
- 波多江傳三

（明治三十一年松山原造日記 住所録より）

四等には犁先一個、五等には鎌一個が贈られました。（明治二十八年五月九日付 信毎記事）

【馬耕の犁】

馬耕の犁は県属の清水三男熊が上水内郡三輪村上松の原友次郎に依頼されて、福岡の林遠里の「勸農社」から馬耕



抱持立犁

作られ福岡製に劣らない手際になりました。日夜製作しても、出来上がるのを待つ注文者が順番を競うほど繁盛したそうです（明治二十七年十一月十四日付 信毎記事）。

郡大会の最初は上水内郡

更級村での競犁会から三年後、明治三十年に上水内郡での第一回馬耕試験が五月五日と六日に三輪村瀧で盛大に開催されました。このようすを信濃毎日新聞明治三十年五月八日付の記事はくわしく説明しています。千二百二十四坪

用の犁を取り寄せ、その後も清水県属は、勸農社に犁や畦溝浚渫のために用いる鍬などを注文しました（明治二十七年五月六日付 信毎記事）。

抱持立犁は福岡の磯野七平铸造所で犁先がつけられ、犁体は勸農社に近い脇山村の大鶴茂吉が製作していました。大鶴茂吉は長野県に出張製作に来ていた記録もあります。

長野県での抱持立犁の製作は、長野県米作改良試験監督員（原田勝三郎のことか）の指揮で更級郡更級村の森茂助という人が明治二十五年から製作を始めました。明治二十七年秋までには数十挺が

優劣を判定するものとす

第二条 試験は一人一回とす

但時宜に寄り畦鋤平鋤の両種を行ふことを得

第三条 試験科目は左の五科

をなし各百点を以て定

点とす

一馬の使役 二姿勢

三運速 四深淺 五齊

第四条 各科目を平均し其得

点に依り左の成績を定

む

一等 九十点以上

二等 八十点以上

三等 七十点以上

四等 六十点以上

以下五等

第五条 各科の採点は、試験

委員の判決する処によ

る

第六条 平鋤を以て試験に応

ぜんとするものは、平

均点百分の七拾五を乗

し得たる数を以て成績

とす

第七条 一等の点数を得たる

もの一人もなきときは

受験人中尤高点を得たもの

を一等とす

とあるべし

第八条 試験の成績に依り各

等級に応じ賞品を付与

することある可し

審査の結果、一、二位の該

当者はなく、三等に七人四等

八人五等三十六人が受賞し、

五等までの入賞者全員に石杯

一つづつ（脚付ガラス杯のこ

とか）が与えられまし

た。また三等には犁先

一個づつ、四等には鎌

一挺が贈られました。

講評では、鋤きにく

い土質だったにもかか

わらずなかなか上手く

できていた。しかしな

がら、腕構え、鋤く回

数、馬の睨み方、抱腰

が正しくない者がい

た。これらは、郡農事

改良教師を招聘する以

前から馬耕を試み自己

流のまま発達したため

であるので今後教師に

ついて伝習すれば、忽ち

手本のようになるこ

また、ただひたすら深く鋤けば良いというのではなく、土質によって鋤方の深淺に注意しなければならぬ。一、二位の該当者が無いのはこれらにより点数が引かれるためである。などの助言がありました。

『長野県農会報 十八号』で

は明治三十七年五月十日に上

水内郡若槻村字上野耕地での



山形県東置賜郡糖野目村 馬耕競争会（大正初期）



昭和 11 年上水内郡競犁会出場記念

上水内郡農会第六回馬耕競技会について報告があり、競犁会のようなすを更にくわしく知ることができます。

各村を代表する参加者は百七名。馬を牽き会場に着くと「到着届」を済ませ、競技をする区画を抽選で選びます。約十名が一斉に犁耕を競いますが、参加者が多数なのでこれが九回におよびました。競技が終了したのは、午後三時。午後五時から褒賞授与式が行われました。

審査委員には更級郡農事巡

回教師の大神長次郎・上水内郡農事巡回教師の小林治郎・米山慶作が委嘱されました。審査員総代は、大神長次郎でした。

大神長次郎はこの日の講評で、①馬の使役では、歩行動作すべてを意のままにできるように平素から馬を訓練すべきである。競技者中には稀に優等者もあるが参加者の多くは中位であった。②姿勢によって作業の巧拙が現れる。姿勢が良くないと深淺が定まらず均等に反転ができな。また馬を十分に使いこなせず、かえって馬に翻弄させられる。多くは中等以上であるが、目に余る者もあつた。③深淺の競技については、砂質壤土あるいは壤土で乾濕が適度だったので作業し易く、多くの人が適度だった。④斉整競技は、平打ち(平面耕)競技者は少数で、畦打ち(畝立て耕)が多数であった。概ね中位である。参加者の中に與市犁を使用し完整した者があつた。と、審査の観点と所

感を述べました。

大会の賞品として、この時の最高位の特別二等賞受賞者には「上等ホーク」二等受賞者には「大形シヤブル」三等受賞者には「金櫛及ブラッシ」四等受賞者には「比重計」が贈られています。

賞品も時を経て、厩肥作業用のフォークや馬の手入れ用のブラシなどに移り変わってきています。

郡大会から地区大会へ

大正期の新聞記事を追うと、郡農会主催でされていた郡競犁大会から大正時代後半になると長野県農会主催に



郡大会 優勝旗



県大会 優勝旗

よつて北信・東信・中信といった地域区分でも競犁会が行われるようになることがわかります。大正十五年五月六日には長野市古牧で北信地域にあたる一市六郡の牛馬耕競技会が、五月九日には北佐久郡岩村田町で東信地域にあたる一市三郡の競技会が行われています。五月十四日には南安曇郡豊科町で中信地域にあたる一市四郡の競技会が行われています。

長野県大会の開催

長野県で県規模の競犁会が開催されたのは、かなり後年のことです。昭和二十五年

十一月十八日・十九日に長野県農業畜力化協会主催により東筑摩郡岡田村で「第一回長野県畜力耕耘大会」が行われました。これは長野県経済連主催として松本市練兵場跡で開催された「第十四回長野県畜産共進会」に重ねて催されたものです。松山記念館にはこの時の「第一回長野県競犁大会入賞者連名簿」があり、上位入賞者の使用した犁の名称もメモ書きされています。畜力犁の全盛期は昭和二十三年～二十六年頃といわれているので、畜力犁が最も農家に普及していた頃の競技大会とみるべきでしょう。

一等賞には松山製作所の



昭和26年第2回長野県大会閉会式



昭和26年第2回長野県大会入賞記念
(左から臼田行夫技師、滝沢寛次塩川村長、柳沢宗役場職員、桜井一二三選手)

勝旗と同様の旗を展示していただきます。いずれも製作の記念に松山株式会社がとりおいたものです。また、神奈川県連合競犁会に贈呈したことを控える記念の写真もあります。大会

へ優勝旗を提供することによって会社の宣伝効果を期待しました。

畜力耕うんから動力耕うんへ

畜力耕による農作業の早さ増収効果が次第に農家に浸透し、畜力による田畑の耕起は明治三十七年になると全国で五割に、大正十三年には七割に普及しました。

長野県畜力化協会主催の競犁会は、昭和二十年代後半には行われなくなりました。昭和二十八年に「農業機械化促進法」が制定され、ハンドトラクタの時代へと移行していったからです。

元農林水産省農林水産技術会議筑波事務所所長の渡邊昇は、松山記念館第十回文化講演会講演録『移り変わり百年』の中で、「昭和三十四年十一月に神奈川県平塚市で行われた御成婚記念全国農業技術交歓大会の開催が、畜力時代から機械化時代への実際のバトントッチだった」と回述して

います。この時は「畜力農機具による畝立て耕と平面耕を畜力犁やカルチベータなどを使って演示するとともに、動力用のティラーを使っての演示がされ」畜力耕うんの集大成と動力耕うんの新技術との披露がされました。

昭和三十年代には、県下の各農業高校で選抜された生徒によるティラーの操作技術競技会も開かれ、機械化されていく農業を支える後継者の技能を高める試みがされました。

(文中 敬称略)
(学芸員 田中壽子)

【参考文献】
『長野県政史第一巻』昭和四十六年 長野県
『日本農業発達史第一巻』昭和二十八年 中央公論社
『福岡県史 近代史料編 林遠里・勸農社』平成四年 福岡県史刊行会
『信濃毎日新聞 データベース』
『長野県農会報』長野県農会
『移り変わり百年』第十回松山記念館文化講演会講演録

二段耕犁甲大型を使用した上伊那郡赤穂町の横山利博が選ばれ、農林大臣賞状とともに賞金千円が、二等賞には上伊那郡飯島村の宮澤正知(片倉カルチベータ)、東筑摩郡和田村の桑原住雄(筑摩犁)、上伊那郡赤穂町の中城春男(信濃)、上水内郡柳原村の深澤勇(東畑南プラウ)、下伊那郡市田村の佐藤八重子(佐々木プラウ)の五名が入賞し知事賞状とともに賞金五百円が贈られました。三等賞には上

伊那郡飯島村の円山嘉一(伊那犁)をはじめ十一名に知事賞状とともに三百円の賞金が贈られました。

翌年、昭和二十六年十一月十五日には、「第二回長野県競大会」が松山製製作所(現松山株式会社)が所在する小県郡塩川村で開催され、そのようすが写真に記録されています。表彰式は塩川小学校校庭で行われ、下村長野県畜産課長から講評がされました。

た。この時は地元塩川村の桜井一二三が二位に入賞しています。

【優勝旗の贈呈】

記念館に収蔵する「昭和十一年五月 優勝旗拝受の記念写真」の説明文から、郡の競犁会で三連覇を果たすと優勝旗が贈られたことがわかります。

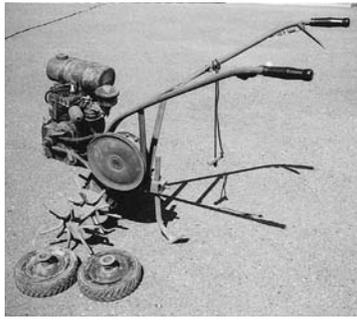
松山製製作所では、競犁会に優勝旗を贈呈していただきました。松山記念館には郡大会と県大会で優勝者に贈られた優勝旗と同様の旗を展示していただきます。いずれも製作の記念に松山株式会社がとりおいたものです。また、神奈川県連合競犁会に贈呈したことを控える記念の写真もあります。大会

資料紹介 クリントンエンジン搭載の メリーティライ

松山記念館では、シバウラのエンジンを搭載したメリーティライを展示しています。上田市の箱山高司氏から「家には、メリーティライの初期段階のクリントンエンジンを載せたやつがある」と寄贈を受けました。

メリーティライは昭和二十八年八月に神奈川県(株)細王舎がアメリカから輸入した二二馬力という小型のハンドトラクタで、寄贈された資料はその初期の形態のものです。

メリーティライは、構造が簡素で扱いやすかったので日本の農家に普及し、同じ昭和二十八年に『農業機械化促進



法』が出されたこともあって、農業が機械化していく追い風をつくったハンドトラクタです。

ハンドトラクタは、昭和二十七八年頃までの普及は一万台以下でしたが、メリーティライが登場し昭和三十一年には普及台数は十万台を越えました。

ハンドトラクタの発展に大きな役割をしたのは、なんといっても空冷エンジンの開発と日本的な作業機が開発されたことにあります。

空冷エンジンは、本田技研(株)がブリッグス、石川島芝浦(株)がクリントンをモデルにして試作研究をはじめました。国産メーカーの育成をはかる通産行政の方針から、昭和三十一年秋に農用小型内燃機関の輸入が停止され、ティライ搭載用の空冷ガソリンエンジンはブリックスやクリントンから国産品に切り換わっていきました。二二馬力のクリントンエンジンは、プラウ耕するには多少馬力が小さかったため、石川島芝浦(株)は三・五馬力のティライ用エ

ンジンを開発し、メリーティライに搭載しました。

(株)細王舎は、昭和二十八年十一月に権利金一億円を払って日本メリーティライ社と提携し、日本の農業にあうアタッチメントを依託生産していきました。なかでも、日本在来の犁を改良して装着させたことは、農家にハンドトラクタ普及していく大きな要因だったといわれています。松山製作所(現 松山(株))は、(株)細王舎の依頼を受けてティライ用和犁である「輪装犁」を開発、昭和二十九年から生産をしています。こうして、シバウラのエンジンを搭載し、「輪装犁」を装備したメリーティライは、全国に普及していきました。

寄贈されたメリーティライは、農業高校が産業教育振興会の補助金を得て昭和二十八年に導入し、実習に使われてきましたが、廃棄処分となり、時を経て箱山氏の元で保管されたものです。

メリーティライは、「車軸耕うん」という奇想天外な発想からつくり出され、前進即耕うんの作業が基本機能でした。寄贈されたメリーティライは、車軸にタコ足状の丸

棒が放射状に突き出た「ベシックローター」を付けています。この「ベシックローター」は、培土板をつけた培土作業や中耕作業などには操作が安定していたので、初期の頃は標準出荷姿勢として取り付けられていました。

メリーティライの農用ラグタイヤは、花岡車両(株)とブリヂストン(株)が協力開発し、昭和二十九年に日本初の農用ラグタイヤの生産が始まりました。ゴムタイヤの開発後、農家の要望もあって標準出荷姿勢はベシックローターからゴムタイヤに変更されています。

記念館に寄贈されたメリーティライは、昭和二十八年頃に購入したと伝えられるとおり、エンジンはクリントンを搭載し、耕うん部は初期に装備されていた「ベシックローター」が付き、移動用ゴム車輪も備わっています。

箱山氏は、「ベシックローター」と呼称していましたが、「棒爪ローター」と呼称してました。農業高校では、「棒爪ローター」で作物の畝間を耕したり、除草をし、「棒爪ローター」は幅の半分ずつを取り外すことができるので、畝間を耕す

ときは左右の幅を半分にして使用しようです。

つい最近まで、エンジンをかけていたということなので、二二馬力のエンジンはどんな音がしていたのか尋ねると、マフラーが小さいので大きな高い音をたてるのだそうです。

エンジンストップ装置が特殊で、プラグの頭上にある鉄片を手で押さえると、プラグからシリンドラーへ電気が流れてエンジンが止まる仕掛けになっていたのでそうです。

箱山氏は、「メリーティライの耕うんは、後に普及していく牽引型のハンドトラクタと比較したらほとんど子供騙しのようなものだが、動力で手軽に耕うんしていくメリーティライは当時としては花形だっただろう。」と述べています。

(学芸員 田中壽子)

【参考文献】

- 一九六五年『農機工業の変遷』新農林社
- 一九六八年『農機産業百年』新農林社
- 一九九七年『雑誌農作業研究』「農業の機械化あれこれ、知られざるヒストリーとエピソード」川辺久男著

第十四回 文化講演会開催

平成十七年十月十五日松山記念館主催、丸子町・丸子町教育委員会後援で、松山株式会社三階ホールにて、第十四回文化講演会が開催されました。



講師は長野県農事試験場病害虫土壌肥料部長 新井利直氏で、長野県における水稲育種と環境にやさしい農業をテーマとして講演された。(聴講者一三七人)

講演会に先立ち主催者を代表して理事長に代わり松山信久専務理事が挨拶に立ち、講演会のご後援を頂いた丸子町、丸子町教育委員会を代表してご出席頂いた堀内憲明町長様に来年三月六日に合併により新上市市になるため、今回で町としては最後の後援になるとし、これまでのご支援に対して謝意を表した。そしてご多忙のなか本日の講演をお引き受け頂いた新井利直様にお礼を述べられて、品種改良の専門家から見た長野県の水稲

育種および土壌肥力面からみた環境にやさしい農業、安全・安心な農作物の提供といった面から資源循環型そして環境保全型有機農業への方向を伺えると思いますので、ご静聴お願いし、まずと開会の挨拶をしました。

続いて後援者を代表して堀内丸子町長は、記念館が農業機械食文化の研究に取り組み日頃からの活動に敬意を表され、新上市と自治体のかたちが変わりましたが、それでも地域を代表する企業としてさらに発展するよう期待を寄せられ、食文化とりわけ美味しい食物、安全な食物に関心を寄せられているご様子の祝辞を頂いた後講演に入った。

はじめに長野県農事試験場の紹介から入り明治三十年にでき平成九年に創立百周年を迎え今年で百八年目となり、現在は作物部・育種部、病害虫土壌肥料部、原村試験地の四つの部と地とからなり、主要穀物・水稲・麦類の品種及び栽培の研究、並びに主要穀物の病害虫及び土壌肥料の研究をやっている。

次いで県内の米栽培地が標高300mから1200mほど広い範囲で、主産地が600m前後である長野県の県農事試験場から全国的に有名になった保温折衷苗代と「箱育苗」の二つの技術

を紹介し、収量の安定及び、増収に大変役立つっていることを話した。

●水稲育種

水稲を例にとつて育種をどうやるかという、基本的にまず交配し、だんだんいろいろなものにいろいろなものに分離して行く中からよい個体を選んでそれを系統にして、生産力・耐病性・対冷性・食味・品質などを調べながら最後に良いものを品種にしていくという一連の作業で交配から新品種が生まれるまで十年もかかります。

そして交配の技術、世代促進栽培の技術、検定・試験の内容等を図や表を交えて解説されました。

ついで環境に優しい農業ということでは、化学合成剤を使用しない温湯種子消毒、化学合成農業にたよらない防除、葉イモチ感染予防、合成フェロモン利用、有機質緩効性肥料、堆肥ベレット等を図や表を交えて解説された。DMAマーカー利用による水稲もち病抵抗性同質遺伝子系統の育成(マルチライン)の新潟コシヒカリの図、さらに「粗玄米重の年次間安定性」のグラフを示して、作況のいい年、悪い年にあまり左右されずに収

たがやす土はぐくむ健康
[農業のおはなし] 発行

10月1日、小学生向け副読本を、発行いたしました。イラストや写真をたくさん使い親しみのもてる内容で、カラー刷りA4判12ページ建てで仕上げました。



平成十七年度当館見学者

総数

(内訳)

- 県外(含外国) 六八・七%
- 東信 一九・四%
- 北信 八二・%
- 中信 二二・%
- 南信 一・六%

第十五回文化講演会決定

日時・平成十八年十月十四日(土)
場所・松山(株)三階ホール
講師・* 日本農業機械化協会 専務理事 宮永富司氏
演題・「タイで見た事感した事」



新入社員の研修見学

松山株式会社の平成十八年度新入社員は、四月三日(月)の入社式終了後、当館を訪れ、創業以来の歴史を研修した。